

終了

春の遠足

2014年4月20日、愛知牧場にて第19回春の遠足を行いました。

今回は9名の方にご参加いただき、愛知牧場に行ってきました。愛知牧場はいつも雨だったり寒かったり……なのですが、今回も数日前までの天気とは打って変わって、寒かったです。

普段遺族会でお会いするみなさんと、バーベキューをし、その後、近くのビニールテント(?)の下で、お湯を沸かしてお茶を飲みました。

遺族の方同士、普段から少しでも支え合える関係ができればという思いから行っているものです。次回は秋、10月を予定しています。よろしければご参加ください。



※写真は何年か前に撮った愛知牧場です。今回はこんなには晴れていませんでしたが……

次回「ディアレスト」のご案内

家族ではないけれど大切な人を自死で亡くされた方を対象に、2ヶ月に1回、遺族会「ディアレスト(Dearest)」が開催されています。

日時: 2014年7月27日(日) 13:30-16:00

場所: 名古屋市中村生涯学習センター

地下鉄東山線「本陣」駅4番出口より徒歩5分

対象: 家族以外の大切な人(恋人・婚約者・パートナー・親友・同僚・上司・部下・先輩・後輩・先生・生徒、など)を自死(自殺)で亡くされた方

参加費: 500円

「～こころの居場所～AICHI自死遺族支援室」次回のわかちあい

以下のように開催されます。詳しくはホームページ等をご覧ください。

日時: 2014年7月12日(土)

▪ 13:30～15:30(開場13:15)

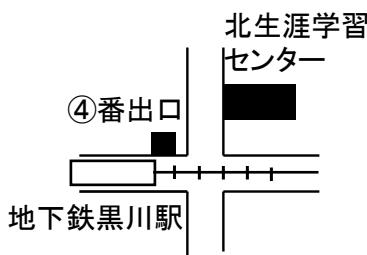
場所: 東桜会館 第一会議室

▪ 地下鉄新栄、高岳両駅から徒歩5分

次回の遺族会

第64回

6月1日(日) 13:15から
名古屋北生涯学習センター
地下鉄名城線「黒川」下車
(4番出口)よりすぐ
参加費: 500円



その後は…
第65回 8月の日曜日
※6月初旬に日程が決まります。

日程は、ホームページまたは、電話案内でご確認いただけます。
パソコンの方
<http://will.obi.ne.jp/remember/>
携帯電話の方
<http://www.will.obi.ne.jp/m/>
電話案内(録音でのご案内)
090-8544-9408

新聞郵送をご希望の方へ

1月～6月末までのお申し込み(前期)…1000円 もしくは 82円切手(80円切手も可)13枚

7月～12月末までのお申し込み(後期)…500円 もしくは 82円切手(80円切手も可)7枚

お申込みは、郵便番号・住所・氏名を記入の上ご送金いただき、切手をご郵送ください。遺族会の当日、受付でお支払いいただいても結構です。

参加費: 500円

連絡先: cocoroibasyo@yahoo.co.jp

▪ 090-4447-1840

水・木 15:00～20:00

▪ 日曜日 18:00～20:00

▪ <http://cocoroibasyo.org/>

連載③ 「ここにいること」(本音編)

羊のミケ

生きてる意味を考える。

先日の大学の授業でのテーマだ。

こういうものは人から教えられるものではないのに。

やや呆れながらも湧き上がる好奇心を抑えきれなかった。

僕はなんで生きてるんだ?毎日そんなことばかり考えて生きてきた。絶望した時だけじゃない。トモダチと別れた時、美味しいご飯を食べた後、眠りに落ちるその前、ふとした時思いついたように浮かんではしばらく離れてくれなかった。

父が死んだ時、死んだら全部終わりなんだとはっきりわかった。善人でも悪人でも現世でしたことがあの世へ持つていけない。何もかもリセットされてゼロになる。それなら、なぜ生きてるんだろう?高校生の頃、太陽が數十億年後に爆発して地球は滅びるという話を聞いた。16歳の僕は衝撃を受け、無力感に打ちひしがれた。あれから9年。僕は身体も心も大きくなつて少なからず自分の意見を持って講義に向かっている。思考の一助になれば良いと思ったからだ。にも関わらず、かけられた言葉はため息が出るほどつまらないものだった。

「五分程差し上げます。周りの方とグループになり、自身が生きている意味とは何かを相談してください。ぼんやりで結構ですので何

かしら答えを考えてみてください」

嘲るような笑いが自然とこぼれた。

あまりにも無茶苦茶な要求に笑うしかなかつた。

退屈したトモダチは「そんなもん一生かかってもわからんわ」

と言い残して机に突っ伏し眠りに落ちた。彼の答えは僕が想定していた通りのものだった。

僕は自分以外の人間の大半は頭の中空っぽだと思ってる。生きてる意味なんて考えないのだろう。ぼんやりとなんとなく毎日を過ごして、皆似たような未来を生きてく。死を知らないから、身近なものに感じていないから、生きてる意味なんて考えない。だから、わからないの一言で思考を放棄するのだ。

講義堂の後ろでは頭空っぽの連中がやかましくしている。講師はさすがに見て見ぬふりできず、明らかに形だけの注意をした。これから90分近くこんな茶番の中にいなきやいけないのか。そう思うと心底うんざりしてきた。トモダチは既に本域の眠りに入っている。僕は所在なく、窓の外に居場所を求めた。青空を裂くように飛ぶ鳥々。緩やかに日々を包む陽光。揺れる木々。長閑だ。この大学に来て一ヶ月。ようやく窓の外の景色にも慣れてきた。(続く)

寄稿

もう関連づけるのは辞めにしよう。したい。たとえ今が息苦しくて、心の栄養が枯渇していたとしても、あの頃の彼と2014年6月を生きる3人とはもう永遠に街ですれ違うことすらないのだから。彼にはこの世界中のどの言語を用いても言い表せない、感情がある。それもパラパラ捲る色見本の如く刻々と変動する。日々の雑多に追いやられている時は、まだいい。皆が寝静まると私の心は暴走する。そんな時は瞑想し浮かんでは消える想いをただ自

然に受け留め、入れ、流す。さあ前を向いて歩くのです。歩かなくていい振り返っていいけど、執着心は手放そう。気持ちだけでも振りだけでも、いいから前進しよう。(S)

寄稿募集

寄稿文を募集しています。詳しくはお問い合わせください。

スタッフ募集

遺族会に参加したことがある方で、会の活動のお手伝いをいただける方募集しています。詳しくはお問い合わせください。

リメンバー名古屋10周年記念冊子

二期原稿募集

「自死遺族のあの日・自死遺族のその後(仮題)」

2003年12月に第一回の分かち合いを開いたリメンバー名古屋は、2013年12月で10年の節目を迎えました。そこで、これまで会にご参加いただいた皆様の思いを集めた、冊子制作を行うこととなりました。

昨年度より原稿を募集しておりました冊子の制作は、今年度の事業として引き続き行うこととなりました。

二期募集をします。みなさまの原稿をお待ちしております。

応募要件

【一般の部】…家族・友人・恋人など、大切な方を自死で亡くされた、概ね70歳以上の方

【リメンバーメンバーの部】…・・・リメンバー名古屋の遺族会に継続的に参加したことのある方(年齢制限なし)

規定

「あの日のこと」「あの日の思い」「その後のこと」「その後の思い」「あの人への思い」をテーマに文章をお寄せください。詩、短歌など、短いものも可。字数制限はありませんが、長い場合調整をお願いする場合があります。

※寄稿くださった全ての原稿を掲載することができませんことを、あらかじめご了承ください。

※掲載にあたり、内容、表現についてご相談させていただく場合があります。

応募期限

2014年9月30日

(書き始めた方は早めにお知らせください。)

応募方法

メールでの応募可。ご連絡させていただく必要がありますので、ご住所・お名前・電話番号・メールアドレスを必ずお知らせください(情報の秘密は厳守致します)。

☆掲載時のお名前:匿名で大丈夫です。どのように掲載するか、お知らせください。

問合わせ先・原稿送り先

下記までお問い合わせください。

メール: remember_nagoya@yahoo.co.jp

FAX: 020-4668-8925

郵便: 〒460-0003

名古屋市中区錦2-18-5 MBE178 リメンバー名古屋

りめんばー

最近知ったことなのですが、家庭に子どもが産まれると、行政からさまざまな子育てのサポート情報が届けられ、保健師が各家庭を訪問し手助けをします。さらに各地に児童館などの施設があったりと、とても手厚いサポート態勢が作られています。それは、行政に限ったことではなく、地域社会の中で、みんなで支え合っていこうという意識が非常に強いように感じます。

もちろん、それでも不足と感じる人もいると思いますが、同じく、いやそれ以上に支えが必要とされる、人が亡くなった時のサポートと比較すると、あまりにその差が大きいことに愕然としました。家族が亡くなった時、行政は大きな支えになってくれることはできません。自死の場合は特に、地域社会は支えどころか、遠巻きにされたり、時に非難されることさえあります。

「子どもへの投資は未来への投資である」というようなことがよく言われます。逆に言うならば、亡くなった者は「過去」であり、過去への投資、サポートはしないという意識が一般に

はあるのでしょうか。亡くなった者の歳を数えることが無駄の典型のように言われ、忘れてあげることが供養であると言われたり、とかく亡くなった者と関わり続けることに対し、世間は冷やかで、否定的な感じがします。

リメンバー憶えている、忘れずにいる。そんな場所である遺族会は、その意味で、世間にはなかなか広くは受け入れられない存在なのでしょう。きっと世の人々は、人を亡くして悲しむ顔よりも、子どもの笑顔を見たいのかもしれません。たとえそれが不確かなものでも、未来という希望を持たないと生きていけないのかもしれません。

今日も日本では、産まれた子どもとおおよそ同じぐらいの数の人が亡くなっています。人を失うことの辛さは多くの人と共有できるはずだと思います。自死も含めて、その辛さをわかちあい、支え合えるようになること—そんな未来への希望は、もう少しだけ捨てずにいたいと思います。(KN)